翻　訳

『コリャード 懺悔録』ポルトガル語全訳注

—第三誡「ドミンゴいはひ日を勤め守るべし」に関わる3つの告解—

Tradução integral portuguesa dos *MODVS CONFITENDI et EXAMINANDI* (Roma, 1632) da autoria de frei dominicano Diego Colhado: Confissões dos pecados dos crentes japoneses seiscentistas contra o terceiro mandamento de Moisés

日埜　博司

2004年度リスボアにおける在外研修中，いろいろな方々の暖かい協力と指導とに浴し，ドミニコ会宣教師ディエゴ・コリャードの著書『懺悔録』（1632年，ローマ刊）に収められた日本語テキスト全文へポルトガル語の訳注を施すという作業をひとまず終えることができた。この間の経緯については，『流通経済大学社会学部論叢』通巻第30号（2005年）所収の拙稿「コリャード『さんげろく』葡語訳注雑感——在外研修余滴として」に記述した。前記葡語訳注はしかるべき準備期間を経，リスボアもしくはマカオで上梓されるであろう。

『流通経済大学論集』通巻第148号（2005年）所収の拙稿「『コリャード 懺悔録』ポルトガル語全訳注——第六誡「邪淫を犯すべからず」に関わる15の告解」に引き続き，今回は，『コリャード 懺悔録』の中からいわゆるいわゆるモーセの十誡中第三誡「ドミンゴいはひ日を勤め守るべし」に関する3つの告解を掲載する。本誌と同時に刊行される『流通経済大学流通情報学部紀要』通巻第19号には「『コリャード 懺悔録』ポルトガル語全訳注——第五誡「人を殺すべからず」に関わる9つの告解」が，『流通経済大学論集』通巻第149号には「『コリャード 懺悔録』ポルトガル語全訳注——第四誡「汝の父母に孝行すべし」に関わる6つの告解」が，それぞれ収められる。

解題の一部として，主に日本における活動に力点を置きつつディエゴ・コリャードの生涯を略述する。その際，主としてホセ・デルガード・ガルシーア師の注釈書『コリャド 日本キリシタン教会史補遺 1621－1622年』日本語版（井手勝美訳，雄松堂書店，1980年）への序としてガルシーア師自身によって執筆されたコリャード伝に拠る。

ドミニコ会パードレ・フライ・ディエゴ・コリャードは，1589年頃イスパニア，カセレス県ミアハーダスの町に生まれた。父の名はマルコス・フェルナンデス・コリャード，母の名はマリーア・サンチェスであった。1604年7月28日，彼はサラマンカのサン・エステバン修道院で聖ドミニコ会に入り，1605年7月29日，同修道院で誓願を立てた。やがて彼は，将来殉教者となる福者アロンソ・デ・ナバレーテの率いる宣教団の一員として1610年，セビーリャから乗船，1611年，一行とともにフィリピンのマニラに到着した。

マニラに到着したコリャードが赴任を命ぜられた先はミンダナオ島カガヤン盆地であった。カガヤン盆地には異なる種族によっていくつかの現地語が話されていたが，コリャードはこの頃すでに卓越した語学的才能を示していたという。厳しい迫害がすでに始まり，ただならぬ困難が予想された日本布教の任務がやがてコリャードに下るのであるが，レオン・パジェスによると，このとき彼に同行を申し出ながら，病気のために念願を果たし得なかった日本人追放キリシタンのビンセンシオ，すなわち塩塚与市ジョアンは「故国に行く修道者に日本語を教えることに専念した」[1]というから，あるいはコリャードも来日前すでに塩塚について日本語を多少なりとも習得していた可能性がある。

パードレ・コリャードは1619年7月末，長崎に入港し，ただちに日本語の習得に没頭した。残念ながらガルシーア師は詳しい出典を明らかにしていないが，1620年3月にパードレ・ハシント・オルファネールが管区長に宛てた書翰に「パードレ・コリャードは日本語の進歩が著しいので，あらゆる階層の人々の告解を聴いています。このような進歩からみて，彼はまもなく私を凌駕することでしょう」と述べられているという。

1621年の初頭には有馬地方で活動し，同地から帰ったコリャードは，大村と長崎の間にある古賀（こが）で，パードレ・オルファネールの「聖役」を助け，その著述『日本キリシタン教会史』の脱稿に協力した。同年2月14日には長崎に在住し，3月末までその地に留まった。4月には郡（こおり）（大村）へ派遣され，4月26日，長崎への帰途，長与（ながよ）に滞在，パードレ・オルファネールが矢上（やがみ）で捕縛されたとの噂を同地で耳にした。捕吏はオルファネールを乗船させて鈴田（すずた）の獄へ届けるために長与まで護送したが，コリャードはそのありさまを山中の農家に潜んで目撃している。コリャードは長与から長崎へゆき，1621年の4月末から6月まで毎日のように，隠れ家を変えながら潜伏を続けた。長崎は，パードレ・オルファネールへ宿を与えた者がことごとく見せしめに投獄されるという逼塞した状況下にあり，当然，コリャードたちドミニコ会パードレを匿ってくれる者はひとりもいないであろうと懸念された。しかし特に志願した18人の家長――「十八人組（ジュウハチニングミ）」と呼ばれた――が，特にドミニコ会士に対して，健康者であると病者であるとを問わず，いかなる時，いかなる状況のもとであろうとも，これに宿を提供する，ただ，霊的必要が生

[1] 『日本切支丹宗門史』下巻，クリセル神父校閲，吉田小五郎訳，岩波文庫，1940 年，317 ページ，注 6。

じたときは彼らが優先的にドミニコ会士の世話に与ること，そして少なくとも年に一度はドミニコ会士の誰かが秘蹟の執行のため彼らの家を訪ねることが，唯一の条件として提示されたという。当然の結末として，「十八人組」ゆかりの者たちから幾人もの殉教者が出た。

ちなみに『コリャード 懺悔録』には，潜伏中の司祭へ宿を提供することに躊躇を覚える信徒たちの心理的葛藤を示す告解が2点見える。しかもそれぞれの告解に対応する司祭からの比較的長めの誡めも載録されている。いずれ葡語訳注とともに他日紹介されるものであるから引用は避けるが，コリャード自身の潜伏体験に多かれ少なかれ関連する懺悔であり誡めであると判断して差し支えあるまい。

1621年6月30日，パードレ・コリャードは長崎の牢獄に潜入することに成功，信徒の告解を聴取した。数ヵ月後の11月と12月，彼は再度，有馬地方の布教に携わった後，12月中旬から，平戸のオランダ商館内に捕らえられていたドミニコ会司祭ルイス・フローレスをオランダ人の手から奪回するという大胆きわまりない計画の準備にとりかかる。結局のところフローレスの救出にはいったんは成功するものの，種々の経緯を経てフローレスは牢獄へ連れ戻され，この挙に協力したルイス弥吉らは酸鼻を極めた拷問を加えられて，コリャードはこれ以後，当局者の厳重な探索を受ける身となる。ドミニコ会の同僚がほぼ全員捕縛されるという逼塞的状況のもと，パードレ・コリャードは管区長代理に指名された。

1622年8月18日，パードレ・フローレスのほかコリャードがマニラから同行した日本人信徒たちが殉教，9月10日から数日にわたって，世に名高い「元和の大殉教」が起こり，その結果，鈴田・長崎・矢上の牢獄にいた宣教師とキリシタンがことごとく姿を消した。その次第はこの殉教事件をつぶさに目撃したコリャードその人により『日本キリシタン教会史補遺』の第69章に詳しく書き留められている。

在ローマのイスパニア聖ロサリオ管区調停者としてマニラ経由ローマへ赴くべしという命令をマニラの上長から受領したコリャードは，日本を去る前，ローマの礼部聖省直属特派使節という資格をもって，1597年2月5日に長崎で殉教したフランシスコ会士・イエズス会士のほかキリシタン総勢26名の列聖・列福手続きに関わる教会法的調査という仕事に従事した。そして当該調査の関係書類を携え，1622年11月初めに日本を発ち，マニラ経由で1623年，ローマに到着した。

ところで教皇グレゴリオ一三世は，1585年1月28日付の勅令をもってイエズス会士以外の修道士による日本布教を禁止した。その後1600年12月12日付で，教皇クレメンス八世は前記の勅令を改め，他会派の修道士の日本布教を許可するが，それには，リスボア・ゴアを経由する者に限るという制限的条件がついていた。そこで，マニラの政庁はこれの放棄を要請する請願書を教皇に送るとともに，その公布を猶予するよう長崎の日

本司教ルイス・デ・セルケイラに申し入れた。イエズス会に属するこの日本司教はしかし，1604年11月この申し入れを斥け，クレメンス八世の勅令を公布した。これはとりもなおさずイエズス会による日本布教の独占が制度化されたことを意味する。

慶長18年12月23日（1614年2月1日）付で徳川家康が起草させたキリシタン禁令にもとづき，在日カトリック宣教師はマカオとマニラに向けて追放されたが，このとき殉教を覚悟して日本に残留・潜伏した宣教師たちがいた。マテウス・デ・コウロスもそのひとりで，このポルトガル人宣教師はイエズス会が日本布教を独占することの正当性を主張するためであろう，元和3（1617）年に，なんと東北から南九州まで15ヵ国に及ぶ75ヵ所のキリシタン信徒代表から証言文書のかずかずを取り寄せた。証言は日本語で行なわれ信徒たちの署名が入っている。そのひとつが元和3年8月27日付で豊後国日出のキリシタン代表から徴収した文書であり，そこには「此へるせぎさん〔迫害。perseguição〕の後，爰元ニハ他門派之出家衆終ニ御見廻無之事」という文言が見える[2]。このたびの迫害以来，他の門派，すなわちイエズス会以外の修道会に属する伴天連方が当地を訪ねてくださることは，ついになかったという証言である。コウロスのこのような動きに対抗してであろう，コリャードもまた，イエズス会による日本布教の独占打破というみずからのもくろみに有利に働くであろう日本人信徒の証言を収集することに奔走した。そうした証言のひとつが，元和6年12月15日付，イエズス会士ゾーラ宛て，平左衛門を初めとするロザリオの組員たちの書翰であり，そこには「どの御門派之伴天連にても，てうす〔デウス。Deus〕の御名代として被成御越，こんひさん〔告解。confissão〕など被成御聞，別而さんととミんこ〔ドミニコ会。Santo Domingo〕の伴天連ぺるせぎさんの難儀之時より此あたりのころびたるきりしたん〔切支丹。Christão〕共を，御立あげなされ」ている旨の証言が見える[3]。いかなる門派の伴天連であれデウスの名代として当地へお越しになったことに変わりはなく，皆，コンヒサンをお聴きになっている。別してドミニコ会の司祭は，迫害という難儀の折から，このあたりの転びキリシタンどもを再び正しい信仰へお導きなされている，というのである。同じ証言には「てうすも御一体，ひいです〔信仰。Fides〕も何国にも壱ツ，でうすの御法も壱つにて御座候ニよて，でうすの御名代を，皆信し奉り，云々」という文言も見える[4]。コリャードの立場からこれを牽強付会すれば，イエズス会であれドミニコ会など托鉢修道会であれ，ただ御ひとりのデウスを拝み，ただひとつの信仰を奉じ，ただひとつのデウスの法を信じていることに変わりはない。したがって「でうすの御名代」（＝パードレ）を皆が信奉するという建前のもと，信徒がドミニコ会の

[2] 松田毅一『近世初期南蛮史料の研究』風間書房，1967 年，再版 1981 年，第六章「元和三年，イエズス会士コーロス徴収文書」1061 ページ。

[3] 同上書第七章「元和年間，ドミニコ会士コリャード徴収文書」1152 ページ。

[4] 同上。

指導下に入ることに何の不都合があろうか，ということになるのであろう。いかなる門派も根本的に同じ宗旨を奉じ唯一のデウスを信仰の拠り所とすることにおいて何ら変わるところはないのにもかかわらず，「唯こんはにや〔イエズス会。Companhia de Jesus〕に計付」[5]けと，信徒に対し圧力を掛けることも辞さないイエズス会士のやり方もまた，イエズス会に対抗心を燃やすコリャードにとってはきわめて好都合な批判材料と映ったであろう。

こうした門派対立をめぐる問題をローマおよびマドリードにまで持ち込み政治問題に転化させようとした，その張本人こそコリャードその人であった。1622年すでにローマに布教聖省（プロパガンダ・フィデ）が創設され，衰退の一途を辿るイベリア両国を後ろ盾としない新しい海外布教の方策が模索されつつあったうえ，そこで大きな影響力を振るうインゴリがイエズス会に好意を持っていなかったこともコリャードに対する追い風として作用したように思われる。パードレ・コリャードはイスパニア系托鉢修道会の利益を代表し，イエズス会が日本布教の独占を図ろうとすることの不当性をヨーロッパ・カトリック世界に執拗に訴えた[6]。そしてポルトガル布教保護権下にあるイエズス会士の抱える諸問題，たとえば日本教会維持のためイエズス会がいくら非難を浴びても断乎廃止しようとしなかった商業活動や，ウスラ（高利もしくは暴利）の徴収などカトリック倫理に抵触する一部日本人信徒の行為に対するイエズス会の甘い姿勢などを取り上げ，その布教方針を論難する陳情書をイスパニア国王宛てに提出した。こうした行動は当然イエズス会の反感・反駁を招いたけれども，コリャードの陳述には布教聖省も相当程度まで傾聴の姿勢を示したようである。コリャードの日本関係三部作というべき『日本文典』『懺悔録』『羅西日辞書』がほかならぬ布教聖省の経費をもっていずれもローマで1632年に刊行されたことは，その証拠と言ってよいであろう。さらにまた教皇ウルバヌス八世は，コリャードの懇請に応じて，「聖職者商人」（ガルシーア師自身がこの言葉を用いている。イエズス会パードレのことである）を違犯とする1633年2月22日付の大勅書を公布している。コリャードはこのように主観的には日本布教継続の意志を有していたに違いないし，そのためにこそイエズス会を追い落とす策謀にも奔走したのであろうが，もはやこの時期，徳川幕閣はキリシタンを援助するポルトガル人の最終的追放に踏み切る準備を進めており，日本にキリシタン教会が再興される希望など客観的には皆無であった。

コリャードは，日本での経験に基づいて，いかなる管区にも属さぬドミニコ会総長直属の修道会の設立を企画し，許されたコリャードは，イスパニア国王の特許状を携え，

---

[5] 同上書。1153ページ。

[6] 同上書所収，第八章「托鉢修道会日本代表コリャード報告書」には「イスパニア国王宛て，コリャード提出，1627 年報告書」「イスパニア国王に対するコリャード陳述書，1630 年」「インド顧問会議宛て，コリャード提出，1631 年報告書」という 3 点の文書が訳載されている。

1635年6月24日フィリピンに到着した。そして特許状を提示してマニラの聖ロサリオ管区から独立したサン・パブロと名乗る修道会の設立方を同管区に要請する。しかしコリャードはやがて次第に排斥され，1637年2月21日マニラに着いたイスパニア国王からの書翰により，前述の特許状の効力は施行前に停止されたこと，さらにはみずからのイスパニア帰還が命ぜられたことを知った。その後，コリャードは，国王の命に従い，帰国の途に就くが，マニラ出帆数時間後，難船・沈没による溺死という悲運に見舞われ，1641年8月初め，毀誉褒貶著しい波瀾に満ちた一生を終える。

最後に『サルヴァトル・ムンヂ』に見える第三誡「ドミンゴいはひ日を勤め守るべし」に関する問い掛けの条々を掲載し，『懺悔録』に見える告解のひとつひとつとの照応ないしは非照応ぶりを検討するための便宜とする（適宜句読点を補い，キリシタン用語がそのままポルトガル語で用いられている場合はこれをカタカタに直す。読みやすさを考え，適宜ひらかなをルビの形で漢字に開き原文には見えない送りがなを送る等の措置を施す）。

第三のマダメント

一，ドミンゴ，並にエケレジヤよりふ(触)れ給ふベアト日に，させるい(謂)はれなくしてミイサを拝まざる事ありや。

二，セスタ，サバド，クワレズマ，其外エケレジヤより，いま(誡)しめ給ふ日に肉食したりや。

三，年に一度定りたるコンヒサン，或は命あや(危)うき時にのぞ(臨)みて，コンヘソル在(まし)ましながら，コンヒサンを申さざりし事ありや。其故はたとひあや(危)うき病なりとも，コンヘソルあり(有)あひ(合)給はずは，コンチリサン計(はかり)にてもすむ也。

四，エケレジヤよりふ(触)れ給ふゼジュンを，余儀なき子細なくしてやぶ(破)りたる事ありや。

訂正

『流通経済大学論集』通巻第148号所収の拙稿「『コリャード 懺悔録』ポルトガル語全訳注——第六誡「邪淫を犯すべからず」に関わる15の告解」113ページ1行目を謹んで下記のとおり訂正する。

（誤） /p.36/ Rocuban no von voqite nitçuite [六番(ろくばん)の御掟(おんおきて)について].

（正） /p.36/ Rocuban no go voqite nitçuite [六番(ろくばん)の御掟(ごおきて)について].

Sanban no mandamiento[7] nitçuite [三番(さんばん)のマンダメントについて]

Circa tertium præceptum.
Acerca do terceiro mandamento.

PRIMEIRA CONFISSÃO ACERCA DO TERCEIRO MANDAMENTO

Ima Padre sama no von fissocu[8] no sacari[9] de gozareba, Domingo iuaibi[10] ni go missa vo vogamu chôbi[11] ga gozaraide, jefi ni voiobanu coto naredomo, ni sando va canai nagara tada iurucaxe de vogami

---

[7] «Daisan, Domingo iuaibi uo tçutome, mamorubexi» [第三, ドミンゴいはひ日を勤め守るべし] (*NIPPON NO IESVS no Companhia no Superior yori Christan ni sŏtŏ no cotouari uo tagaino mondŏ no gotoqu xidai uo vacachi tamŏ DOCTRINA*, p.51); «Ho terceyro mandamento he: "Sanctifica as festas"» (O *Cathecismo Pequeno de D. Diogo Ortiz*, p.183); «Recorda-te do dia de sábado, para o santificar. Trabalharás durante seis dias e farás todo o teu trabalho. Mas o sétimo é o sábado consagrado ao SENHOR, teu Deus. Não farás trabalho algum, tu, o teu filho e a tua filha, o teu servo e a tua serva, os teus animais, o estrangeiro que está dentro das tuas portas. Porque em seis dias o SENHOR fez os céus e a terra, o mar e tudo o que está neles, mas descansou no sétimo dia. Por isso, o SENHOR abençoou o dia de sábado e santificou-o» (*Bíblia Sagrada. Para o Terceiro Milénio da Encarnação*).

[8] Fissocu [逼塞]. *Estar escondido, ou encerrado, ou retraido não saindo a publico. Vt*, Fissocu suru [逼塞する] (*Vocabulario*, f.95v).

[9] Sacari [盛り]. *Força, & vigor dalgũa cousa. Vt*, Fana zacari [花盛り], l, Fanano sacari [花の盛り]. *Tempo em que estão em seu vigor as rosas, ou flores*. ¶ Toxino sacari [歳の盛り]. *Flor, & vigor da idade, &c* (*Vocabulario*, f.214v).

[10] Iuaibi [祝ひ日]. *Festa, ou dia santo: palaura que corre na Igreja, por que os dias de festa de Iapão, se dizem* Iuaino fi [祝ひの日] (*Vocabulario*, f.136v). «iuabi» *in textu*.

[11] Chôbi [調備]. Totonoye sonayuru [調へ備ゆる]. *O aparelhar, ou temperar cousa de comer.* ¶ *Item, Per met. No Ximo* [下 (Kiŭxiŭ)] *se toma por boa conjunção, oportunidade, &c* (*Vocabulario*, f.49). Esta palavra, escusado será dizer, se utiliza aqui no sentido metafórico. No que diz respeito a outro exemplo desta palavra empregada de maneira metafórica, o quase único exemplo que Ōtsuka Mitsunobu tem encontrado é o seguinte verbete visto no *Dictionarivm sive Thesavri Lingvae Iaponicae Compendivm*: «In tempore, a sazon a tiempo. Yoi xiauaxe ni [好い仕合はせに]. Yoi jibun ni [好い時分に]. Chôbi ni [調備に]» (p.250. Cf. *Koryādo Sangeroku Shichū*, *op.cit.*, p.70, anotação adicional 2).

28
Sarí nagara naró jibun ni tõgue maraxôzu.

Ficqiŏ: vatacuxi chicai ſuru còto ni xinareta monõ de, ùchi no mòno ní varui cãgami vo miſuru vie ni, sòre mo xei mon sùru tocòro vo ſabacatte ye mõdòqi maraxeíde sòno màma ni vòqi maraſuru.

Sànbàn no mandamiento nitcuite.

IMa Padre ſama no von fiſſocu no ſacàri de gozarẽba Domingo iuabini go miſſa vo võgamu chôbiga gozaraíde jeſi ni voiobànu còto narẽdomo, ni ſando va canài nagàrà tãda iurucàxẽ de võgàmi maraxenàn de gozàtta. Maichido va Padre nõ gozàru tocòro vo xitte; michí de nánde monài còto ni tãzzuſauatte, tçùita tòqi va mo xi ſajime ſaxerarèta tocorõde, xibuichi fõdo cacàxe maraxita.

Sòno ùie: go miſſa vo võgamu jibuni vôcata buxi njin de iránu còto ni nen vo chiraite võgami maraxitã ga, vazato sõ itaxi maraxènu, tãda ſei ſei iro iro no còto ni famàtte iru tocorõ de, go miſa no vchi nimo nenga achi chiri còchi chiri ſurẽba mei vacu itaxi maraſuru. Sòno ùchi niſando bacàri vàqimaie nagara go miſſa vo võgami ni maitte ſajime cara ſuie mãde sòno tocoro ni macàri itta rẽdomo, sòre ni nen vo càqe maraxenanda niiotte, võgamánu to vonàji cõto de gozàru to vomoi maraſùru.

Màta isõgaxij còtõ gaatte Domingo iuaibi ni vàre mo fataràqi, vchi no vacato ſannin ni mo xígòto vo ſaxe maraxita; ichido va ſito tòqi no aída, mitàbi va ſiſitoi no còto de gozàtta; ſari nagarà ichído no xígoto vo xezumba dài jinaru ſon ni avõzuru ni qiuamatte võgiatta niiote ſaxi nobùru coto mo ieíde tçucamàrçutta ſacai ni amàri qi ni cacàri maraxènu.

Xi-

『コリャード 懺悔録』「三番のマンダメントについて」

maraxenande gozatta. Ma ichido[12] va Padre no gozaru tocoro vo xitte, michi de nandemonai[13] coto ni tazzusauatte[14], tçuita[15] toqi va mŏ xi[16] fajime[17] saxerareta tocorode, xibuichi[18] fodo cacaxe[19] maraxita.

今パテレ様の御逼塞の盛りでござれば，ドミンゴ・祝ひ日に御ミサを拝む調備がござらいで，是非に及ばぬことなれども，二・三度は叶ひながら，ただ忽せで拝みまらせなんでござった。ま一度はパテレのござる所を知って，道で何でもないことに携はって，着いた時はまうし始めさせられたところで，四分一ほど欠かせまらした。

今，パテレ様方は迫害のため潜伏して世人の眼に触れるところにはいらっしゃいませんので，ドミンゴ・祝い日に御ミサに与る「調備」つまり好機もございません。是非に

---

[12] Ichido [一度]. *Modo de contar vezes* (*Vocabulario*, f.355v).

[13] Nandemo nai [何でもない]. *Cousa de pouco momento, ou proueito. Vt*, Nandemo nai coto [何でもない事] (*Vocabulario*, f.176v).

[14] Tazzusauari [携はり], Tazzusauaru [携はる], Tazzusauatta [携わった]. *Occuparse, ou embaraçarse em algũa cousa. Vt*, Gacumonni tazzusauaru [学文に携はる]. *Occuparse em estudar*. ¶ Qiŭxenni tazzusauaru [弓箭に携はる]. *Andar metido, ou occupado em guerras, ou acustumarse às armas* (*Vocabulario*, f.244).

[15] Tçuqi [着き], Tçuqu [着く], Tçuita [着いた]. *Chegar. Vt*, Minatoni tçuqu [港に着く]. *Chegar ao porto* (*Vocabulario*, f.248).

[16] Xi [し], Suru [する]. *Fazer. Este verbo se ajunta cõ muitos nomes conforme a significação dos quais tem varios sentidos, & vsos. Vt*, Mexiuo suru [飯をする]. *Fazer de comer*. ¶ Reôriuo suru [料理をする]. *Temperar o comer*. ¶ Fôcôuo suru [奉公をする]. *Seruir, &c* (*Vocabulario*, f.298v).

[17] Fajime [始め], Fajimuru [始むる], Fajimeta [始めた]. *Começar. Ajuntase às raizes de muitos verbos. Vt*, Yomi fajimuru [読み始むる]. *Começar e ler*. Caqi fajimuru [書き始むる]. *Começar a escreuer, &c* (*Vocabulario*, f.77v).

[18] Xibuichi [四分一]. *Das 4. partes a hũa* (*Vocabulario*, f.299).

[19] Cacaxi [欠かし], Cacasu [欠かす], Cacaita [欠かいた]. *Faltar, ou fazer falta em algũa cousa. Vt*, Oraciouo cacasuna [オラショを欠かすな]. *Fazei que não aja falta na oração* (*Vocabulario*, f.244).

及ばぬことでございますが，二～三度ばかりミサにあずかろうと思えばそうできたものを，ただ怠け心だけでそうすることを致しませんでした。もう一度はパテレ様のいらっしゃる場所を知り，そこへ向かいましたところ，途中でつまらぬことに手を取られまして，着いたときにはもうミサを始めてしまっておいでになり，四分の一ほど欠礼しました。

Cum modo maxime vigeat sacerdotum persecutio, & maneant occulti, ob hocque non sit opportunitas audiendi missam diebus dominicis & festis, non imputatur mihi impossibile. bis tamen vel ter cum potuissem audire sacrum; ex negligentia non audiui. alia vice sciens locum vbi erat sacerdos missam celebraturus: ita me in re nullius momenti occupatus detinui in via, quod quando perueni iam missam inceperat: vnde quartæ eius parti in principio non interfui.

Por andarem a monte os reverendos padres, não temos conjuntura nem oportunidade para ouvir a sagrada missa aos domingos e feriados. Por duas ou três vezes, devido ao meu descuido, não a ouvi, apesar de me ser possível fazê-lo. Numa outra vez soube onde se encontrava o padre e dirigi-me para lá, mas distraí-me a meio do caminho com coisa de pouca monta, pelo que, chegando ao destino, já a missa tinha começado, tendo faltado a um quarto dela.

SEGUNDA CONFISSÃO ACERCA DO TERCEIRO MANDAMENTO

Sono uie: go missa vo vogamu jibun ni[20] vôcata[21] buxinjin de iranu coto ni nen[22] vo chiraite[23] vogami maraxita ga, vazato[24] sŏ itaxi maraxenu. Tada feijei[25] iroiro[26] no coto ni famatte[27] iru tocoro de, go

---

[20] «jibuni» *in textu.*

[21] Vôcata [大方]. *Pola mayor parte.* ¶ *Item*, Vôcata [大方]. l, Vôcatano [大方の]. *Cousa mediocre, ou ordinaria.* ¶ Core vôcatano cotodeua nai [これ大方の事ではない]. *Isto não he qualquer cousa, nem das ordinarias* (*Vocabulario*, f.275v).

[22] Nen [念]. *Pensamento.* ¶ Nenuo iruru [念を入るる]. l, Nenuo tçucŏ [念を遣ふ]. *Por diligencia, & cuidado.* ¶ Nenuo chirasu [念を散らす]. *Cuidar varias cousas, ou derramar o pensamento* (*Vocabulario*, f.180v).

[23] Chiraxi [散らし], Chirasu [散らす], Chiraita [散らいた]. *Espalhar.* ¶ Fanauo chirasu [花を散らす]. *Espalhar flores, ou fazer algũa cousa limpa, & luzidamente, como que espalha flores, ou rosas* (*Vocabulario*, f.48v).

[24] Vazato [態と]. *Adu. De proposito, ou acinte* (*Vocabulario*, f.133v).

[25] Feijei [平生]. i, Tçuneno coto [常の事]. *Sempre, ou ordinariamente.* Feijeina [平生な]. *Cousa ordinaria* (*Vocabulario*, f.85v).

misa no vchi nimo nen ga achi[28] chiri cochi[29] chiri sureba meivacu[30] itaxi marasuru. Sono uchi ni sando bacari, vaqimaie[31] nagara, go missa vo vogami ni maitte, fajime cara suie made sono tocoro ni macari ita[32] redomo, sore ni nen vo caqe maraxenanda niiotte, vogamanu to vonaji coto[33] de gozaru to vomoi marasuru.

その上御ミサを拝む時分に，大方無信心で，要らぬことに念を散らいて拝みまらしたが，態とさう致しまらせぬ。ただ平生色々のことに嵌まって居るところで，御ミサの中にも念があち散りこち散りすれば，迷惑致しまらする。その中二・三度ばかり，弁へながら，御ミサを拝みに参って，初めから末までその所に罷り居たれども，それに念を掛けまらせなんだによって，拝まぬと同じことでござると思ひまらする。

---

[26] Iroiro [色々]. *Muitas cores.* ¶ *Item, De muitas maneiras. Vt*, Iroironi cauaru [色々に変はる]. *Mudar se de muitas maneiras* (*Vocabulario*, f.134).

[27] Famari [嵌まり], Famaru [嵌まる], Famatta [嵌まった]. *Acaruarse, ou meterse muito como na lama, caua, poço, &c.* ¶ Doroni famaru [泥に嵌まる]. *Atolar na lama.* ¶ *Aliquando per met.* Xeqenno cotoni famaru [世間の事に嵌まる]. *Estar muito metido nas cousas do mundo.* ¶ Acuni famaru [悪に嵌まる]. *Estar entregue, & metido nos peccados* (*Vocabulario*, f.78).

[28] Achi [あち]. *Adu. Ali, ou Là* (*Vocabulario*, f.2v).

[29] Cochi [こち]. *Adu. Aqui* (*Vocabulario*, f.53). Cf. Achi, cochi [あち，こち]. *Adu. De cà pera là* (*Vocabulario*, f.2v).

[30] Meiuacu [迷惑]. *Afflição, ou sentimento. Vt*, Meiuacu xenban nari [迷惑千万なり]. *Ter grandissima afflição, & pena* (*Vocabulario*, f.79).

[31] Vaqimaye [弁へ], Vaqimayuru [弁ゆる], Vaqimayeta [弁へた]. *Entender, ou discernir.* ¶ Iengouo vaqimayenu [前後を弁へぬ]. *Não dar acordo de si.* ¶ *Item, Pagar o fiador pollo acrèdor, ou recompensar outro o que hum não pode pagar.* ¶ *Item, aliquando, Pagar as diuidas proprias, sed non tam propriè* (*Vocabulario*, f.268).

[32] «macari itta» *in textu.*

[33] Vonaji [同じ]. l. Vonaji coto [同じ事]. *O mesmo, ou a mesma cousa* (*Vocabulario*, f.281v).

そのうえ御ミサを拝んでおりましたとき，おおむね真面目な信心もなく要らぬことに考えを散らしつつ集中せずに拝んでおりました。が，ただわざとそうしたわけではございませぬ。平生いろいろなことに熱中しておりますので御ミサの最中にも気があちらに散りこちらに散り，大変心苦しく存じます。御ミサは一心に拝まねばならぬと分かっておりますし，かつその場所には一応始めより終わりまでおりはするのですが，肝心の御ミサには一心に心を向けて拝むことを致しませなんだ。これでは拝まぬのと同じであると思います。かようなことが二～三度ございました。

Præterea; quando audio missam maiori ex parte absque deuotione, & attentione huc illucque mentè circũ vagando, illic adsto; hoc tamen ex aduertentia non facio; sed cum continuo diuersis sim ocupationibus immersus; etiam quando audio missam, mens huc illucque dispergitur non sine mei molestia. bis tamen vel ter cum aduertentia etiam si missam auditum iuerim, & ibi corporaliter a principio vsque in finem perseuerauerim; sed quia nullam adhibui attentionem; credo fuisse idem audire, ac si non audissem.

Para mais, falando de um modo geral, por ocasião da missa à qual assisti, ouvi-a não de modo devoto mas dispersando o pensamento em várias outras coisas desnecessárias. Mas não o fiz de modo intencional. Como estou normalmente envolvido em muitas actividades, sinto grandes remorsos por distrair o pensamento de cá para lá, até por ocasião da sagrada missa. Eu bem sei que tenho de pôr em mim maior zelo quando estiver a ouvir a missa, mas, apesar de me encontrar fisicamente nesse local desde o início até ao fim, não pus a diligência necessária para ouvi-la com atenção, o que, segundo penso, é igual a não escutá-la. Isto aconteceu-me por duas ou três vezes.

TERCEIRA CONFISSÃO ACERCA DO TERCEIRO MANDAMENTO

Mata, isogaxii[34] coto ga atte, Domingo iuaibi ni vare mo fataraqi[35],

---

[34] Isogauaxij [忙はしい]. *Cousa apressada*. Isogauaxisa [忙はしさ]. Isogauaxŭ [忙はしう] (*Vocabulario*, f.134v). Isogaxij [忙しい]. *Idem*. Isogaxisa [忙しさ]. Isogaxŭ [忙しう] (*Vocabulario*, f.134v).

[35] Fataraqi [働き], Fataraqu [働く], Fataraita [働いた]. *Trabalhar*. ¶ *Item, Pelejar*. ¶ Cocorono fataraita fito [心の働いた人]. *Viuo, industrioso, &c*. ¶ Qino fataracanu fito [気の働かぬ人]. *Molangaz*, ou froxo* (*Vocabulario*, f.82). [Nota*: Molancão, molancas, molangueirão, molangueiro e molanqueirão. *adj. e s.m. Pop.* Diz-se do homem mole, indolente. António de Morais Silva, *Novo Dicionário Compacto da Língua Portuguesa*, [Lisboa], Editorial Confluência, 3.ª edição, 1987]

vchi no vacatŏ[36] sannin ni mo xigoto[37] vo saxe maraxita; ichido va fitotoqi[38] no aida, mitabi va fifitoi[39] no coto de gozatta. Sarinagara,

---

[36] Vacatŏ [若党]. *Mancebos, que seruem a algum senhor.* ¶ *Item, No Ximo, Moço de seruiço.* ¶ Matavacatŏ [又若党]. *Mancebos soldados que seruem a criados honrados dalgum senhor* (*Vocabulario*, f.266v).

[37] Xigoto [仕事]. *Seruiço, ou trabalho de mãos* (*Vocabulario*, f.301).

[38] Toqi [時]. *Hora.* ¶ Toqiuo facaru [時を計る]. *Medir o tempo, ou as horas.* ¶ Toqiuo matçu [時を待つ]. *Esperar tempo, ou conjunção.* ¶ Toqiuo vxinŏ [時を失ふ]. *Perder tempo, ou conjunção.* ¶ Toqiuo toru [時を取る]. I, Toqitoriuo susu [時取りをする]. *Tomar, ou escolher tempo por agouro pera fazer algũa cousa.* ¶ Toqiga vtçuru [時が移る]. *Mudarse, ou passarse o tempo, & as horas.* ¶ Toqi itaru [時到る]. *Chegarse, ou vir a hora determinada de algũa cousa. Vt*, Fanjŏno toqi itatta [繁盛の時到った]. *Chegou o tempo, ou hora da propagação da ley, &c.* ¶ Toqiuo vru [時を得る]. *Achar boa ocasião, & tempo.* ¶ *Tem os Iapoens seis horas de dia, & seis horas de noite, as quaes contão por nomes de doze animaes. s.* Ne [子], Vxi [丑], Tora [寅], V [卯], Tatçu [辰], Mi [巳], Vma [午], Fitçuji [未], Saru [申], Tori [酉], Inu [戌], Y [亥]. *Pollos quaes parece que entendem doze signos celestes* (*Vocabulario*, f.266v).

No *Vocabulario da Lingoa de Iapam* não se regista a palavra «Fitotoqi», mas pode-se confirmar que «Fitotoqi» corresponde literalmente a "uma hora", o que equivalia a duas horas actuais como se pode esclarecer através da descrição de os japoneses terem tido «*seis horas de dia, & seis horas de noite*». O padre Luís Fróis escreve o seguinte no seu Tratado acerca da diferença cultural Europa-Japão (Luis Frois S.J., *Kulturgegensätze Europa-Japan (1585). Tratado em que se contem muito susinta e abreviadamente algumas contradições e diferenças de custumes antre a gente de Europa e esta provincia de Japão*, ed. Josef Franz Shütte S.J. Tōkyō, Sophia Universität, 1955): «Nós contamos as oras de huma, duas, tres, até doze; | os Japõis as contão desta maneira: seis, sinqo, 4, 9, 8, 7, 6, etc» (Capitulo 5º-14). Para se tornar compreensível esta descrição, explico o que Fróis quer dizer através da expressão «seis, sinqo, 4, 9, 8, 7, 6, etc», utilizando a definição dos vocábulos equivalentes a «seis, sinqo, 4, 9, 8, 7, 6, etc» vistos no *Vocabulario da Lingoa de Iapam*:

«Mutçu» [六つ] é «*Seis*» (*Vocabulario*, f.365), que quer dizer, "as seis horas da manhã" ou "o período compreendido entre as cinco e as sete da manhã".

«Itçutçu» [五つ] é «*Cinco*» (*Vocabulario*, f.357v), que quer dizer, "as oito horas da manhã" ou "o período compreendido entre as sete e as nove da manhã".

«Yotçu» [四つ] é «*Quatro*» (*Vocabulario*, f.400v), que quer dizer, "as dez horas da manhã" ou "o período compreendido entre as nove e as onze da manhã".

«Coconotçu» [九つ] é «*Nove*» (*Vocabulario*, f.340v), que quer dizer, "o meio-dia" ou "o período compreendido entre as onze da manhã e a uma da tarde".

«Yatçu» [八つ] é «*Oito*» (*Vocabulario*, f.399), que quer dizer, "as duas horas da tarde" ou "o período compreendido entre a uma e as três da tarde".

ichido no xigoto vo xezumba daijinaru son ni avõzuru ni qiuamatte vogiatta niiotte, saxi noburu[40] coto mo ieide tçucamatçutta sacai ni, amari qi[41] ni cacari maraxenu.

また，忙しいことが有って，ドミンゴ・祝日に我も働き，内の若党三人にも為事をさせまらした。一度は一剋の間，三度は日一日のことでござった。さりながら，一度の為事をせずんば大事

«Nanatçu» [七つ] é «*Sete*» (*Vocabulario*, f.366), que quer dizer, "as quatro horas da tarde" ou "o período compreendido entre as três e as cinco da tarde".

«Mutçu» [六つ] é «*Seis*», que quer dizer, "as seis horas da tarde" ou "o período compreendido entre as cinco e as sete da tarde".

«Itçutçu» [五つ] é «*Cinco*», que quer dizer, "as oito horas da noite" ou "o período compreendido entre as sete e as nove da noite".

«Yotçu» [四つ] é «*Quatro*», que quer dizer, "as dez horas da noite" ou "o período compreendido entre as nove e as onze da noite".

«Coconotçu» [九つ] é «*Nove*», que quer dizer, "a meia-noite" ou "o período compreendido entre as onze da noite e a uma da manhã".

«Yatçu» [八つ] é «*Oito*», que quer dizer, "as duas horas da tarde" ou "o período compreendido entre a uma e as três da manhã".

«Nanatçu» [七つ] é «*Sete*», que quer dizer, "as quatro horas da tarde" ou "o período compreendido entre as três e as cinco da manhã".

[39] Fifitoi [日一日]. *Hum dia* (*Vocabulario*, f.89v).

[40] Saxinobe [差し延べ], Saxinoburu [差し延ぶる], Saxinobeta [差し延べた]. *Estender, ou dilatar. Vt*, Sonoyoua saxinobesaxerarei [その夜は差し延べさせられい]. *Dilatai, ou differi essa noite* (*Vocabulario*, f.222).

[41] Qi [気]. *Coração, espiritos vitaes, ou vigor do coração.* ¶ Qiga sanzuru [気が散ずる], l, qiuo sanzuru [気を散ずる]. *Desabafar o coração.* ¶ Qiga tçucaruru [気が疲るる]. *Estar muito cansado, & abafado do coração.* ¶ Qiga tçumaru [気が詰まる]. *Idem.* ¶ Qiga tçuqu [気が付く]. *Tornar m si o que esmoreceo.* ¶ Qiga tçuquru [気が尽くる]. *Estar muito debilitado, & exhausto das forças interiores.* ¶ Qini ataru [気に当たる]. *Dar no coração.* ¶ Qini cacaru [気に懸かる]. *Fazer escrupulo, ou tocar no coração.* ¶ Fitono qiuo nadamuru [人の気を宥むる]. *Consolar a alguem.* ¶ Qiuo yauaraguru [気を和らぐる]. *Abrandar o coração.* ¶ Qiuo nomu [気を呑む]. *Afligirse muito, ou estar atribulado.* ¶ Qiuo vxinõ [気を失ふ]. *Esmorecer.* ¶ *Item, Perder o animo.* ¶ Qiuo vru [気を得る]. *Tomar alento* (*Vocabulario*, f.194).

なる損に遭はうずるに窮まっておぢゃったによって，差し延ぶることも得いで仕ったさかいに，あまり気に懸かりまらせぬ。

また「忙しいこと」，つまり緊急で急かされることが出来したとき，ドミンゴ・祝日に私自身が働き，内の若党三人にも仕事をさせました。一刻の間働かせたことが一度，一日中働かせたことが三度でございます。しかしながら，この仕事をさせねば非常な損害を蒙るという事態のため，せっぱつまってそうしたのでございまして，しかも延期のできぬ仕事だったものですから，さほど気に懸けてはおりませぬ。

Ter etiam laboraui & laborare fecit tres domesticos meos dominicis & diebus festis, semel per spatium vnius horæ Iaponiæ (quæ est duæ ex Europa) ter verò fuit per totum diem; sed vnius diei labor & occupatio si differretur, & illo die non fieret, maximo mihi esset præiuditio: & cum propterea non posset differri, & propter hoc damnum fugiendum laborauerim vid etur mihi nõ multum fuisse peccati.

Ao ocorrer-nos um negócio iminente, não só trabalhei aos domingos e feriados como também obriguei os meus três criados a trabalharem. Até este estar realizado, o qual incluiu quatro dias de domingos e feriados, obriguei os moços no primeiro a trabalharem duas horas e nos restantes três a trabalharem o dia inteiro. Estando pressionado pela situação urgente, e não querendo sofrer prejuízos por não cumprir o prazo, o que aconteceria se eu assim não tivesse procedido, pois não era prorrogável, nem fiz caso dos moços[42].

---

[42] «¶A festa se deve guardar e sanctificar nã fazendo obra servil, nam trabalhando nem fazendo trabalhar corporalmente em notavel quantidade porque a obra muyto pequena nã quebranta a festa, e ho que pouco se afasta do meio da virtude nõ he vicio, como tomar huũ figuo ou dous da figueira alhea nõ he furto. Mas a obra spiritual, como entender, orar, ensinar per palavra ou per scrito nã he servil nem quebranta a festa. Nem as obras que são pera serviço de Deos, scilicet, procesoões, peregrinações, [dar] os sacramentos. Nem as obras neçessarias de iminente necessidade propia ou do proximo, scilicet, vida, saude, conservaçam dos beens. Nem as obras de piedade, como hir visitar e curar os doentes, fazer as sepulturas, enterrar, etc» [日埜試訳――祝い日は遵守されかつ聖化されなければならない。召し使いが行なうような仕事をしてはならないし，肉体を労するような仕事をしても，させてもならない。ただしそれは顕著な仕事量に限っての話であって，きわめて僅かな労働ならばそれは祝い日を穢すことにはならない。美徳の核心部からわずかに乖離しただけの行為は，他人のイチジク畑からひとつやふたつのイチジクを失敬することが盗みでないのと同様，悪徳ではないからだ。

しかし精神的なわざ，たとえば悟性を働かせたり祈りを捧げたり言葉もしくは書物によってものを教えたりすることは，卑しくはなく祝い日を冒すことでもない。デウスに仕えるためのわざ，たとえば聖体行列や巡礼やもろもろの秘蹟を執行することも同様，祝い日を冒瀆しない。さらにまた，自分自身のために，あるいは隣人のために緊急避難的な必要，たとえば生命・健康・財産保全に関わる仕事を行なう必要が生じた場合もまた同様だし，慈悲のわざ，たとえば病者を訪ねたり癒したりする行為，死者を埋葬したり土中に埋めたりする行為もまた祝い日を冒瀆しない] (*O Cathecismo Pequeno de D. Diogo Ortiz*, p.184). «¶Quebrantam este mandamento os que trabalham ou fazem trabalhar sem necessidade ou piedade ou serviço de Deos. Os que em festas pecam mortalmente, os que nam ouvem Missa, os que per sua nigrigencia nam rezam, nem dizem Missa, nam ministram os sacramentos segundo regra e custume da sua Ygreja. Os que nam jejũam quando e como mãda a Sancta Ygreja, e os jeujũs de voto ou penitencia» [日埜試訳――次のような人々はこの戒律を冒すことになる。すなわち必要もないのに，あるいは哀れみの心なく，あるいはデウスの奉仕にもならぬのにドミンゴ・祝い日に労働したり労働させたりする人。祝い日にモルタル科を犯す人。ミサ聖祭を拝まぬ人。みずからの怠慢によって祈りを捧げなかったりミサを行なわなかったり，みずからの教会の決まり・慣わしに従って行なうべきもろもろの秘蹟の執行を行なわぬ人。サンタエケレジア〔聖なる教会〕の命ずるときに，そして命ずるようにゼジュン〔断食〕を行なわぬ人。さらにまた，誓願あるいは改悛によるゼジュンを行なわぬ人] (*ibid.*, pp.185-186).